

自称悪役令嬢な
妻の観察記録。③

しき
Shiki

精霊王

すべての精霊の王にして、ゼノの伯父。『調和』を司っている。

縁

ゼノの父親にして、精霊王の弟。穏やかな性格。

嵐鳥

ゼノの母親にして、風の高位精霊。話し始めるとなかなか止まらない。

クロ

パーティアと契約している精霊。黒狐や幼女メイドに擬態している。

セシル

アルファスタ国の王太子。頭脳明晰すぎて退屈だった日々を変えてくれたパーティアを大切にしている。

ゼノ

セシルと契約している精霊。普段は侍従としてそばに控えている。

闇狐

クロの母親にして、闇の精霊王。一見、妖艶な悪女っぽいけど……？

執事服の青年

闇狐の傍りに控える青年。ゼノを目の敵にしている。

パーティア

セシルの妻にして、アルファスタ国の王太子妃。『悪役令嬢』に憧れつつも、不思議と周囲の人たちを幸せにしてしまう。

目次

自称悪役令嬢な妻の観察記録。 3

書き下ろし番外編
バーティア、クロに語られる。

自称悪役令嬢な妻の観察記録。

3

一 パーティア、精霊たちの仲裁初日。

アルファスタ国王太子である私、セシル・グロー・アルファスタと、妻であり元自称悪役令嬢であるパーティアが、シーヘルビー国から帰国して二週間が経った。

シーヘルビー国では多少のトラブルはあったものの、無事にパーティアの友人であるリソーナ妃の結婚を祝うことができたし、その後の帰国の道中も問題は起きなかった。

帰国後は、多少仕事が溜まっていたものの、優秀な側近たちの尽力のおかげで、少し頑張るだけで通常の業務量に戻すことができた。

……まあ、側近たちの目の下には限^{くま}ができ、多少体重も減っていたけど。

パーティアも、少し仕事が溜まっていたようだけど、彼女が帰国後なるべく休めるようにと、彼女の友人たち……特に、私の弟の婚約者であるジョアンナ嬢が中心になって頑張ってくれていたみたいで、私と同じくらいのタイミングで通常業務に戻ることができた。

ただ、パーティアのほうは業務が一段落した段階で、彼女がいなくて寂しかったらしい友人たちが一緒に過^{はて}ごせる時間を作ってほしいと言い出したため、ここ数日はいつもよりお茶会などが増え、忙しくも楽しそうな日々を過ごしている。

「……平和だね」

額にうつつすらと浮かんだ汗を拭いつつ、朝日を眺める。

運動で少し火照^{はて}った体に、朝の清涼な空気が心地いい。

「殿下！ 人を打ち据えつつ何を言ってるっしょるんですか!？」

私の足元に膝をついてゼゼエと息を荒くしているゼノが叫ぶ。

若干、涙目になってこちらを睨んでくる彼に、私は満面の笑みを返した。

「おや、打ち据えるなんて失礼だね。少し早く目が覚めたから剣の稽古に付き合ってもらっていただけだろう?」

「大体それ自身が、パーティア様が『お友達や侍女たちと朝のヨガをやるんだ』と起きて早々に部屋を出ていってしまったことへの八つ当たりでしょう!？」

「ん? 言っている意味がよくわからないな。私はただ、妻が頑張って健康を保とうとしてることに触発されて、私も頑張ろうかなと稽古をしたただけだよ」

笑顔のままそう話すと、ゼノはげんなりとしたように俯^{うつむ}いた。

ゼノが立ち上がるよりも早く私たちのもとに到着したパーティーアが、バシッとゼノに人差し指を突き付ける。

その動作に、立ち上がりかけていたゼノは目をぱちくりさせて動きを止めた。

「犯人はゼノなのですわ!! 観念するのですわ!!」

「ふんすつ」と鼻息を荒くしているパーティーアと、状況がわからず困ったように首を傾げるゼノ。

パーティーアはこれでもうすべて通じたと思っっているらしく満足そうな顔をしているけど、ゼノは状況がわからなすぎて何も言えずにいる。

……このままじゃ、話が進まなそうだね。

「ティア、どうしたんだい?」

助け舟を出すつもりで尋ねると、そこでやつと私もいることに気付いたのか、パーティーアはこちらを振り返り、驚いたような顔をした。

「まあ、セシル様もご一緒でしたのね。セシル様もゼノを怒ってくださいませ!」

「怒るのは構わないけれど、まず何に對して怒ればいいのか教えてくれるかい?」

腰に手を当てて「怒ってます」アピールをしているパーティーアの手を取り、宥めるようにその甲を撫でる。

そして、彼女の顔を覗き込んで尋ねると、彼女はキョトンとした。

「わかりませんわ」

「わからない? じゃあ、ゼノはなんの犯人なんだい?」

「知りませんわ」

思わぬ彼女の返事に、私とゼノは頭に疑問符を浮かべる。

怒っている張本人が怒っている理由がわからないとは、どういう状況だろうか?

「わからない? 知らない? 一体どういうことなんだい?」

少しでも事情を探ろうとさらに質問を重ねると、彼女はキョトンとした顔のまま首を捻ったが、ようやく状況を説明したほうがいいと思いつたのか話し始める。

「事情はよくわからないのですけれど、クロがいつも私のところに来る時間になっても来ないので、先ほど心配になってクロの部屋まで見に行きましたの。そうしたら、ドアにこれが貼ってあったのですわ!!」

パーティーアが、手に持っていた紙を私たちに見えるように突き出した。

その紙には一言……『犯人はゼノ。』と書かれている。

……そっか。犯人はゼノなんだね。

「ゼノ、心当たりは?」

私はゼノに笑顔で尋ねる。
ゼノはパーティーアの話聞いていくうちに、何か思い当たることがあったらしく、顔を青くしている。

「いえ……あの……でも……」

しどろもどろで、肯定も否定もしないゼノに、私は溜息を吐く。

この感じだと、どちらが悪いのかはまだわからないけれど、クロとゼノの間でなんらかの揉め事があったのは確かだろうね。

「やっぱりゼノが!!」

私同様、彼らの間に何かあったのだと確信したらしいパーティーアが、再び文句を言い募ろうとする。

「ティア、ひとまずそこまで」

今にも怒涛の勢いで言葉を紡ぎ出しそうなパーティーアの口に軽く人差し指を当てて、制止する。

クロのことが大好きなパーティーアが、クロが部屋に引きこもるほど怒るようなことをしたのである。ゼノに文句を言いたくなる気持ちはわからなくもない。

けれど、ゼノにはゼノの言い分があるかもしれないし、その言い分を当事者であるク



口がないこの場で聞いたとしてもなんの解決にもならないだろう。何かで揉めていて、それが解決に至っていない時は、大概当事者それぞれに言い分があつてそれが対立している時だからね。

私たちが仲裁に入ることはできるかもしれないけれど、最終的にはクロを引つ張り出して話をさせないといけないわけだから、余計な手間は省こう。

「セシル様、なぜお止めになりますの!？」

「話はクロの部屋の前まで移動してからにしよう。出てきてくれるかはわからないけれど、もし可能ならクロも交えて話をしたほうが、お互いの言い分を聞いていいからね」

……まあ、クロは喋らないから最終的にゼノが話して、その時のクロの反応を見てクロの言い分を推測するという形になるだろうけどね。

「なるほど。直接勝負ですのね!! ゼノ、覚悟するのですわ!!」

バーティアが、ビシツとゼノに指を突き付けて宣言する。

「……わかりました。クロと話をしてはいけないのは確かですからね」

バーティアの意気揚々とした姿に、これは逃れられないと察したのだろう。ゼノが溜息と共に肩を落として頷いた。

「それじゃあ、クロの部屋まで移動しよう」

何か面白そうなものが見られそうだしね。

ニツコリと笑顔で移動を促す私に、バーティアは満面の笑みで頷き、ゼノは「ああ、面倒な人に知られてしまった」と頭を抱えていた。

クロの部屋は、私たち夫婦の部屋から近い場所にある。

基本的に、王族と使用人とは生活する区域が離れていることが多い。けれど、王族専属の使用人の中でも極一部の選ばれた者は、主が呼んだ時にすぐに馳せ参じることができるよう王族が生活する区域に部屋を持つことが許されている。

クロとゼノはそこに個人の部屋を持っていた。

正直、クロのメイドとしての腕はたいしたことはない。

というか、やろうと思えばできるのかもしれないけど、クロはバーティアの膝に乗ってお菓子を食べたり、気分次第でどこかに行ってしまったりと、あまりメイドとしての意識がないのだ。

そもそもクロがメイドの格好をしているのは、契約精霊であるクロが主人であるバー

ティアのそばにやすくするための擬態なので、実際のところ、メイドとしての力量はそこまで求められていない。

まあ、メイドとしての力量がなくても、パーティアを守るといふ一点に関してはクロの右に出る者はいないだろうから、それだけでも十分に仕事をこなしているとと言えるのだけだね。

そんなクロがその区域に部屋を与えられている理由はもちろんパーティアの契約精霊であり、彼女がパーティアのそばにすることを望んだからだ。

要するに、特別待遇というやつだね。

ちなみに、私の契約精霊であるゼノがその区域に部屋を与えられているのは、本人の希望ではなく、私が彼を呼び出して扱き使いやすい……もといゼノが侍従として優秀であると周囲が納得したからだ。

彼がその区域に住み始めたのは、私がまだ幼い頃だったけれど、私が父上たちにゼノの優秀さをアピールして頼むやいなや、父上も母上も、たまたま同席していたパーティアの父であるノーチェス侯爵も認めてくれたのだから間違いない。

まあ、その時、周りの大人がなぜかゼノに対して憐れむような視線を向けていた気がしなくもないけど……きつと私の思い違いだ。

「……ここですわ」

私たちの先頭を歩いていたパーティアが、王族専属使用人たちの部屋が並ぶ区域の一番奥で足を止める。

うん。クロの部屋はここで間違いないだろう。

……パーティアが剥がしてきたはずの『犯人はゼノ。』という紙がまた貼られているから、間違えようがない。

「クロ！ ゼノとセシル様を連れてきましたわ！ 話をしたいので出てきてくださいませ!!」

パーティアが扉をノックして、中にいるであろうクロに心配そうに声をかける。

しばらくすると、カチャツという音がして、クロがヒョコツと顔だけを出した。

「クロ！ 良かったですわ!!」

きつとパーティアが一人で来た時は、いくら話しかけても顔を出してくれなかったのだろう。

パーティアが心底ホツとした表情を浮かべる。

……ところが。

ペタツ……パタンツ……ガチャツ。

「……………」

クロは、扉に紙を貼ると顔を引っ込め、そのまま扉を閉めて鍵をかけてしまった。再び廊下に沈黙が満ちる。

「…………えっと、何々…………『要求は既に伝えてある』？ だってよ、ゼノ？」

クロの頑なな態度に固まってしまったバーティアとゼノの代わりに、私が新たに貼られた紙に書いてある内容を読み上げ、そのメッセージが向けられた相手であろうゼノに話を振る。

私に名前を呼ばれてハツとした様子で動き出したゼノが、「うわあ…………マジかあ…………」と頭を抱えた。

「ゼノ、どういうことですか？」

ゼノの反応を見て、バーティアが詰め寄る。

…………ちよつとゼノとの距離が近すぎだね。君の夫はヤキモチ焼きだから、もう少し離れようか。

ニツコリと笑みを浮かべて、バーティアの腰を抱き寄せ、距離を取らせる。

バーティアはその行動の意図がわからないようでキョトンとしたけれど、私のすることだからさつと何か意味があるのだろうと勝手に解釈してそれに従ってくれた。

一方、私の行動の意味をすぐに察したゼノは、「え、このタイミングでもそれですか？」と呆れた目で私を見てきたけれど、笑顔を返したら黙った。

「で、クロの要求はなんなんだい？ 私たちでできることなら、協力してあげてもいいよ？」

ゼノのことはどうでもいいけれど、クロがこのまま部屋に引きこもる状態が続けばバーティアが心配することは間違いない。

場合によってはこの部屋の前から動かなくなるなんてこともあり得るから、ここは早めに解決しておきたい。

「いえ、あの…………実は…………」

もうここまでできたら逃げられないと悟ったのだろう、ゼノがポツリポツリと昨晚クロとの間に起きた出来事について話し始めた。

「…………要するにお付き合い？ 結婚？ の挨拶をしに親のところに行こうと誘われたのに、ゼノがそれを断ってクロがいじけたってこと？」

ゼノが言いづらそうに話した内容を大まかにまとめると、そんな感じらしい。

——ここ最近、私たちの周りではあちこちで『結婚』に関する話題が持ち上がって

いる。

私とパーティーアの結婚を皮切りに、リソーナ妃たちの結婚式があり、今後は順次パーティーアの友人たちと私の側近たちの結婚式も行われる予定になっている。

私はそうでもないけれど、パーティーアは友人たちから色々な相談が持ち込まれているらしく、ほぼ毎日のように結婚に関する話題が出ているようだ。

本来、貴族の結婚なんて政略重視で幸せなものばかりではないのだけれど、なぜか彼女の周りには幸せそうな人たちがばかりが集まる。

否。集まるというよりも、パーティーアが、友人たちが幸せになれるよう手助けし、それが報われた結果と言ったほうが正しいかもしれない。

とにかく、そんな感じなものだから、当然、パーティーアと常に一緒にいるクロは、皆の幸せそうな姿を見続けることになった。そして、自分も結婚をしてみたいと思うようになったようだ。

その結婚のお相手というのが、私の契約精霊でもあるゼノだ。

私とパーティーアが夫婦となったことにより、私たちと常に一緒にいる彼らも必然的に一緒にいる時間が増えた。元々私たちが結婚した頃には恋人のような関係になっていたのだが、最近になってさらに関係が深まったようだ。

とはいえ、闇の精霊であるクロは、光の力が強い昼の間は力を温存するために十歳くらいの狐耳と尻尾のついた少女の格好をしているか、黒狐の姿をしているかのどちらかだ。だから、二人が恋人として仲良くしていても、傍から見れば、兄が妹を可愛がっている場面か、青年が動物を可愛がっている場面しか見えないのだけだね。

むしろ、昼間の姿のクロとゼノが恋人同士に見えたら、ゼノのロリコン疑惑が生じて問題になる。

「なぜですか？ ゼノはクロと結婚する気はありませんの？」

パーティーアがゼノをキッと睨みつける。

その目には「うちの子を弄もよほんだんじゃありませんわよね？」と問い詰めるような圧が込められている。

「いえ、そうではなくてですね！ そ、そもそも私たち精霊には結婚という概念がないんですよ!! だから当然親への挨拶なんて習慣もなくてですね!!」

慌てて弁明するゼノ。

彼の話によると、そもそも精霊には結婚という概念自体がなく、代わりに『伴侶』というものがあるらしい。

具体的にいうと、人間のように結婚式をしたり、親に紹介したりする文化はなく、結

婚したことを申請することもない。

その代わり、生涯を共にすると心に決めた相手を『伴侶』として自分たちの中で定める。一度伴侶を定めれば、一生離れることなく添い遂げ、相手を何よりも大切にすることでそうだ。

……まあ、どこの世界でも浮気者と呼ばれる例外はあるみたいだけど。

「それでしたら、ゼノとクロは伴侶同士ではありませんの？」

パーティーアは、ゼノの説明を最初は厳しい顔で聞いていた。でも、それがどうやら精霊と人間の文化の違いによるものらしいとわかると、表情を穏やかなものにし、ひとまは大人しくゼノの話に耳を傾けていた。

そして、話を聞いているうちに生じた疑問を、コテンツと首を傾げながらゼノに直球でぶつける。

「そ、それは……伴侶……だと……思いはするんですけど……」

——バンツ!!

「伴侶です！ 私たちは完璧な伴侶です!!」

少し恥ずかしそうにポソポソと言うゼノに、扉の向こうで聞いていたクロが苛立ちを覚えたみたいだ。不満をアピールするようにクロの部屋の扉が叩かれ、ゼノが慌てて断

言をした。

……ゼノ、もう完璧に尻に敷かれてるね。

「それでしたら人間だの精霊だのとこだわらず、結婚の挨拶にも行ったらいいんじゃないですか？」

何がいけないのかわからないという様子で、パーティーアが尋ねる。

まあ、確かに文化が違っててもやりたいことがあるのなら、二人で相談してやればいいだけだ。

そこに何か文化的な禁忌があるのなら話は別なんだろうけれど、クロがなんの躊躇いもなくねだり、それが受け入れられずに拗ねている時点で、やる文化がないだけで、できないことではないのだとわかる。

クロは、自己主張が強くマイペースに見えるけれど、その実、結構周りの様子をよく見ている。

相手を気遣う心も持っているし、多少の悪戯やちよっかいは出してきても相手が本気で困ったり悲しんだりすることはしない。

だから、これは本来ちよっとした我儘とかお願いという程度の内容なのに、それをゼノがなんらかの理由で頑なに拒んでるだけ……ということなんだろう。

「いや、でも、他がしていないことをしたら目立つじゃないですか！ それに、そんなことをしたら絶対に姉たちに散々からかわれることになるんですよ!!」

パーティーから純粹な疑問をぶつけられ、観念したように頭を抱えて本心を吐露するゼノ。

「そういえば、ゼノには姉が何人かいるのだったけ？」

あまり興味がなかったから聞き流していたけれど、大昔にそんな話を聞いた気がする。ゼノは、精霊の中で唯一、全属性を使える精霊王の血筋だ。

確か、精霊王を含め、精霊王の一族の本質は『調和』であり、各属性の精霊たちと違つて複数の属性を扱うことができるという話だった気がする。

ちなみに単純に『精霊王』という場合には、すべての精霊の王という意味で使われるが、各属性にもそれぞれ王があり、その王たちは光の精霊王とか木の精霊王とか闇の精霊王とか、頭に各属性をつけて呼ばれる。だが、各属性の王は、全体の精霊王とは違い、それぞれの属性しか使うことができないらしい。

だから、闇の高位精霊であるクロは闇属性しか使えない。一方で、精霊王の血筋であるゼノは、メインは風と水だけれど、全属性を一応使えるということになるようだ。

そんなゼノは、精霊王の甥っ子という立場にあたるらしい。

ゼノの父が精霊王の弟で、母は風の精霊王の妹か何かだった気がする。

そして、ゼノのご両親は大層仲がいらしく、ゼノには兄弟が大勢いる。

しかも、全員女性でゼノが末っ子。

その結果、気の強い姉たちに可愛がられつつも、いいように使われたりからかわれたりして生きてきたゼノは、姉たちに苦手意識を持っているようだ。決して仲が悪いわけではないみたいだけれどね。

本人曰く、「あの人たちは集まるとろくなことをしない」とか「いつもからかってくる」とかそういう感じ。

よく考えると、ゼノの苦労体質は、その辺が影響しているのかもしれない。

……うん。決して私が扱こき使つかっているせいではない。

「ゼノ」

「……なんですか、殿下」

私がニッコリ笑つてゼノの肩にポンツと手を置くと、彼は俯うつむかせていた顔を上げた。

……ねえ、ゼノ。なんで今、私が肩に手を置いた瞬間、体をビクツとさせたのかな？ しかも、こんなに優しく声をかけてあげているのに、なんでそんなに怯えているんだい？

「精霊だの人間だのにかかわらず、一般的に付き合いたての男女や結婚をする男女というものは、冷やかされ、からかわれる運命なんだよ」

「殿下は誰にも冷やかされたりからかわれたりしてなかったじゃないですか!!」
私が折角励ましてあげたというのに、ゼノが文句を言ってくる。

私だってパーティーと結婚した時には……あれ? おかしいな。クロが結婚式当日に小さな悪戯いたづらをしたくらいで、そこまで冷やかされたりからかわれたりした記憶がない。

あ、でもパーティーのほうは散々声をかけられていたね。

真っ赤になる私の妻は可愛いから仕方ないよね。

「あ、すみません。よく考えたら殿下を基準にするのが間違っていました。殿下は怖……威厳があるので、からかえる人なんていませんよね」

「……ゼノ?」

「……ひっ! すみません! すみません!!」

折角励ましてあげたのに、恩を仇あだで返された気分だよ。

この件が済んだら、話し合いをしないとイケなさうだね。

でもとりあえず今は……

「うん。じゃあ、ゼノのほうも問題はなさそうだね。どうやら威厳を持てばゼノの心配

事も全部解決するみたいだし。ああ、そうだ。ゼノとクロが両親への挨拶を済ませたら、こちらで結婚式を挙げることにしようか。精霊界での結婚式についてどうするかは、二人……主にクロに任せるとしよう」

私は満面の笑みで、方針は決まったとばかりにパチンツと手を叩く。

異論は認めないという意思表示はしっかりとっておかないとね。

「ちよっ! 威厳とか無理でしょう!! というか、なんでハードルを上げようとしてるんですか!! 元々は挨拶に行く行かないの問題でしたよね!」

私の言葉にギョツとしたようにゼノが吠える。

もちろん、もう結論は出たから異論は認めない。

人が折角優しく対応しようとしたのに、それを突っぱねたのだから構わないだろう? それに、何よりそのほうが楽しそうだしね。

「まあ! それは素敵なアイデアですわ!! クロ、出てきてくださいませ!! 話がいい形でまとまりましたわよ!!」

「まとまってません!! まとまってませんから!!」

私の提案に目を輝かせたパーティーが嬉しそうにクロを呼ぶ。

ゼノが焦っているのは……うん、気にしていないみたいだね。

きつと、「照れているんですわね！」とでも思っているのだろうか。

「……？」

パーティーアの声に反応し、クロがドアをガチャッと開けて顔を出す。

「決まった？」と尋ねるように首を傾げてはいるが、嬉しそうに尻尾がユラユラと振られ、狐耳がピクピク動いているあたり、ドア越しではあってもちゃんと話は聞いていたんだろう。

「クロ、ご両親へのご挨拶の後に、こちらで結婚式を挙げましょう!! 私も協力しますわ!!」

トテトテと小走りで近付いてきたクロは、そのままギユッとパーティーアに抱きつく。

そして、私を見て、いつも通りの無表情のままグツと親指を立てた。

顔は変わらないのに、どこか満足げだ。

きつと、部屋に閉じこもり貼り紙をしたのは、この展開を期待してのことだったのだろうか。

なかなか策士だね。

「ま、待つてください！ 勝手に決めないでください!! 嫌ですよ！ 嫌ですからね、そんな恥ずかしいこと!! 大体、こっちで結婚式を挙げたら私はロリコン扱いされる

じゃないですか!!」

一件落着の空気が流れ始めたことに焦って、ゼノが必死で叫ぶ。

その嫌がりようを見て、嬉しそうだったクロの耳と尻尾が悲しげに下がった。

そして、パーティーアから離れてゼノのもとに行き、ワーワーと文句を言うゼノの服をギユッと掴む。

「……クロ？」

なんとか両親への挨拶からの結婚式という流れを止めようと必死で言い募っていたゼノが、クロが来たことに気付いて動きを止める。

表情はいつもと変わらないのに、どこか悲しげな様子でゼノを見上げるクロ。

そして、自分のほうを指差してコテンツと首を傾げる。

それを見た瞬間、ゼノがギョツとした顔をし、慌て始める。

「いや、別にクロのことを恥ずかしいとか思っているわけじゃないよ！ もちろん、クロと伴侶になるのが嫌だとかも全然思っていないから！ むしろそれは歓迎だから、そんな顔はしないで！ お、俺はただ、からかわれるのが嫌だというか、恥ずかし……いやだから、クロのことが恥ずかしいんじゃないか、あ、あ、あ、なんて言えば……」

どうやら、クロが「私のことがそんなに恥ずかしいの？」と訴え、それに驚いたゼノ

が必死で弁明を始めたらしい。

……ねえ、ゼノ。早めに解決しないと、クロ大好きな私の妻が爆発しそうだよ？

「……ゼノ、うちのクロの何が不満なんですの？」

残念。どうやら私の妻の怒りは既に限界を突破してしまったみたいだ。

しょんぼりとしたクロが、トボトボとパーティーアのほうに歩いてきて、そのままギョツと彼女に抱きつく。

こうなると、もう男に勝ち目はないだろうね。

何をして悪者になるのはこちらだ。

惚れた弱みというのもあるだろうし。

「クロ、大丈夫ですか？ 泣かないでくださいませ」

抱きついてきたクロの頭を、パーティーアが優しく撫でる。

クロは耳も尻尾も垂れ下がっており、いかにも哀れを誘う風体だ。

でも……

パーティーア、クロは抱きついて顔を埋めているだけで、泣いてはいないと思うよ？

クロ、パーティーアやゼノに見えないように「余計なことは言うな」という視線を向けるのはやめようか？

「いや、だから、別にクロのことを恥ずかしいとは思ってませんから！ す、好きだから伴侶として望んだわけですからね!! その辺、精霊は人間と違って一途なのは君だつてわかっているだろう？」

パーティーアの非難の視線に耐え切れなかったのか、単純に伴侶であるクロが悲しむ姿を見ていられなかったのか、ゼノが必死でクロへの想いを訴え始めた。

本人からしてみれば必死なんだろうけれど、見ているほうは面白いね。

さて、そろそろ折れる頃かな？

「あゝもう！ わかりました！ わかりましたから!! 両親への挨拶も行きますし、結婚式も挙げますから!!」

ゼノが少し涙目になりながら言った。

クロの耳がピコンッと立ち上がり、尻尾もユラユラと揺れ始める。

「クロ、良かったですわね!!」

ホッとした様子で満面の笑みを浮かべるパーティーアと、顔を上げてご機嫌そうにパーティーアの顔を見て頷くクロ。

おや？ クロの顔が少し赤い気がするんだけど？

もしかして、さっきのゼノの必死の愛情表現が嬉しかったのかい？

クロを抱き上げて、嬉しそうにクルクルと回り出すパーティーア。その傍らでは、ゼノが床に手をつけて「負けた」とばかりに打ちひしがれている。

うん、あれは最初から勝てる戦いではなかったからね。

でも、ちょっと可哀想だから、助け舟くらいは出しておこうかな？

「……まあ、最初に結婚式をすすめた罪悪感はない……気もするから。」

「……殿下」

私が歩み寄ると、ゼノは涙目で恨みがましそうに見上げてくる。

そういう視線を向けられると、折角用意した助け舟を片付けたくなるんだけど……

まあ、今日は面白いものを見せてもらったから良しとしようか。

そんなことを考えながら、ポンツとゼノの肩に手を置く。

「ゼノ、結婚式には、クロに大人の姿で出てもらえばいいんだよ。なんなら、式自体を夜にしてもいいしね。そうしたら、少なくともこっちでロリコン扱いはされないうよ」

「っ！なるほど!! 殿下もたまにはいいと言いますね!!」

「ゼノ？」

「なんでもありません!!」

「たまには」とはどういう意味だろうね？

どうやら後で話し合うべき内容が増えたみたいだ。

「ご両親への挨拶については君たち二人で行くだろうし、自分たちでなんとか……」

「セシル様！ クロがご両親への挨拶のために精霊界に行く際に、私のことも紹介したいから一緒に来てほしいと言ってますわ!! もちろんいいですわよね!!」

「……」

パーティーアの発言に、私とゼノの動きがピタッと止まる。

「……で、殿下はお忙しいでしょうから、来なくていいですからね？」

ゼノが焦った様子で先手を打ってきたけれど……そういうわけにはいかないよね。

ゼノの肩に置いたままになってきた手に、笑顔で力を込める。

「そうかい。ゼノも私についてきてほしいんだね？」

「いえ、そんなことは決して……」

「来てほしいんだよね？ ……ティアとクロが暴走したら、君一人でなんとかできるのかい？」

後半、声を潜めてゼノの耳元で囁くと、ゼノはハツとしたように顔を青ざめさせた。

「私は可愛い妻のことが心配……なのと、ちょっと面白いことになりそうだから、そぼ

で観察したい。ゼノは何かあった時に私にティアを止めてほしい。お互いの利害は一致している気がするけど?」

さらに耳元で囁き続けると、「観察メインですよ?」とか眩きつつも、ゼノにも思うところはあったようで渋々頷く。

交渉が済んだところで、パーティアたちに顔を向ける。

「ああ、もちろん構わないよ。ゼノもそういうことなら私のことも紹介したいから是非一緒について言ってくれているし」

クロガ「え? 嘘でしょ?」と胡散くさいものを見るような目を私に向けてきたけれど、ゼノが拒否もせずに視線を逸らしているのを見て、大体のことを察したようだ。

「仕方ないわね」とでも言うように、小さく嘆息している。

「まあ! セシル様も一緒にいらっしやるのですわね!! それは嬉しいですわ!!」

パーティアの顔がバァアツと明るくなる。

私が一緒に行くに聞いて喜ぶ彼女に、胸が温かくなる。

「私も君と出かけるのが楽しみだよ」

ゼノから離れ、満面の笑みを浮かべているパーティアのほうに歩み寄る。

それと入れ代わるように、クロはゼノに駆け寄っていく。

「私、クロやゼノのご両親にお会いできるのも嬉しいですけど、精霊界に行くのも初めてですから凄く楽しみですわ」

うさうさしているパーティアをソツと抱き寄せ、落ち着かせるようにゆっくりと頭を撫でる。

「私も楽しみだけれど、行く前に片付けなさいといけない仕事は一緒に頑張ろうね? あと、精霊界のことは基本的に一部の人間を除いて言っではいけないことになっているから、精霊界に行くことも当然内緒だよ? いない間のアribaイ工作や誰にまで伝えるかは私のほうで考えるから、それが決まるまでは誰にも言っではいけないからね?」

このテンションのまま誰かに喋しゃべられたら大変なことになるからね。そこはきちんと釘を刺させてもらう。

「はっ! そうでしたわ! 私、嬉しさのあまり色々な人に報告してしまうところでしたわ!!」

……どうやら先手を打って正解だったようだ。

「とりあえず、私たち二人が黙って消えるわけにはいかないし、常に誰かしらがそばにいるのが当たり前の私たちが数日単位でいなくなることを誰の手も借りずに隠すのは無理だから、誰かに協力を頼むよ。協力者はこちらで厳選するからね。おそらく、父上や

母上、君の両親や友人、あとは私の側近たちには話すことになると思うけど、確定するまではこのこと自体を口にははいけないよ」

「わかりましたわ!!」

真面目な顔で何度も大きく頷くパーティーア。

……うん。パーティーアは秘密を守ろうとするけれど、嘘や誤魔化しが苦手だ。だから彼女の友人たちあたりには早めに伝えてフォローしてもらおうかな。

思わず苦笑するけれど、妻が楽しそうだからまあいいかと結局は思ってしまった。

「……クロ? いえ、いいんです。むしろ、本来伴侶の可愛い我儘わがままくらい聞いてあげないといけないのに、恥ずか……照れくささが勝ってしまったって、クロに嫌な思いをさせてすみませんでした」

私たちが今後のことについて話している間に、クロとゼノも無事仲直りをしたようだ。クロがゼノにギョッと抱きつき、まるで「ありがとう」とでも言うように頭をゼノの胸すに寄り寄せている。

「あ、でも! 結婚式は夜やりましょう!! クロの力が万全の時に、『大人なクロ』でやりましょう!! きつと君には大人っぽいドレスがよく似合うので!!」

……ゼノ、必死だね。

そして、クロ。君、首を傾げているけれど、ゼノの意図はちゃんと理解しているよね?

理解した上で「よくわかんない」的な顔をしてゼノのことをからかっているよね?

まあ、でもきつと最終的にはゼノの希望を叶えてあげるんだろうし、特に問題ないか。そんなことを考えながら二人を眺めていたら、クロと目が合った。

その視線に「楽しんでるんだから余計なことを言わないでよね?」という意味が含まれていそうな気がするの、きつと気のせいじゃないだろう。

「……さて、これから楽しくなりそうだね」

腕の中でなおも嬉しそうに笑っている妻の顔を見つつ、私は小さく呟いた。

二 パーティア、精霊界出発一週間前。

「……で、殿下。これで今日の分の仕事は最後です……けれど？」

執務室を訪れたチャールズが、神妙な顔で私に書類を差し出してくる。

別に悪いことをしているわけではないはずなのに、妙にビクビクとしているのが不思議だ。

「そうかい。ご苦労さま」

ニッコリと笑顔で受け取り、書類をバラバラと捲めくって中身を確認する。

うん、いつも通り問題はなさそうだね。

ついでに調べてほしいことはあるけど……まあ、明日でいいだろう。

「内容は問題ないから、この部分の資料だけ持ってきてきておいてくれるかい？ それが終わったら少し早いけど帰っていいよ」

「あ、あの、まだ太陽が空にありますよ……？」

「ん？ そうだね」

今はまだ十六時になるところだ。

大分傾き始めてはいるけれど、太陽が空にあってもおかしくはない。

「本当に本当にいいんですか？ 畏わな的なあれではなく？」

「畏わなつて、君は私をなんだと思っているんだい？」

チャールズは仕事が早く終わることに戸惑いを感じている様子で、何度も確認して行く。少し呆れを含んだ声で答えると、きょとんとした顔で口を開いた。

「え？ もちろん魔お……」

「……そんなに仕事を増やしてほしいのかな？」

言い終わる前に笑顔に威圧を込め、首を傾げる。

チャラッと視線で示した私の机の上には、振ろうと思えばいくらでも彼に振れるだけの書類の山がある。

私がやるなら夕食までにすべて済むと思うけれど、この中からいくつか選んでチャールズに渡せば、彼の帰宅はきつと目を跨またぐことになるだろう。

側近となった彼と仕事をしていく中で、彼がどの程度のペースで仕事をこなすのか、どういった仕事得意でどういった仕事苦手なのかは把握済みだ。

「じよ、冗談ですって!! ここ一週間ほどで、無茶ぶりもなく暗くなる前に帰れる日々

がどれだけありがたいことか身に染みてますから!! 殿下には感謝してますとも!! ただ、なんでこんなに急に変わったのかななんて思ったりなんかしてですね……」

慌てて言い募るチャールズをジーツと見つめると、彼はサツと視線を逸らした。

交渉などの仕事をやっている時にはこういった失言はしなくせに、どうも私の前だと気が緩みすぎるようだ。

私が甘やかしすぎているのかな？

それなら、遠慮なくもつと厳しくするけど？

でもまあ、今回はこっちにも思うところがあるから……見逃してあげることにしようか。

「別にたいした理由じゃないよ」

小さく嘆息してから苦笑まじりに口にした私の言葉に、チャールズだけじゃなく、私の部屋にたまたま集まっていた側近たちも意識を向けてくる。

どうやら、ここ最近私から振られる仕事が少ないことに対して、クールガンもネルトもシヨンもバルド……は何も気にしてなさそうだね。入口脇に立って警護をしつつ、側近たちが私の言葉を気にして固唾を呑んでいる様子に「ん？ どうした？」とでも言いたげに首を傾げている。とにかく、私の側近たちは約一名を抜かして全員、気になっ

ていたようだ。

ちなみに、シヨンは、彼自身の王族としての仕事もあるため、私がすべての仕事を割り振っているわけではない。

まあ、昔から甘えん坊なところがある弟に、少しでも成長してほしいと思って、課題を出したりしているからね。おそらく私の側近として仕事をしている者たちと同じ反応をしようんだろうけれど。

「ここ最近、城を空けることが多いからね。その分、君たちにしわ寄せがいつているのもわかっている。だから、私がこうして城にいる間に、少しでも英気を養っておいてもらおうと思っただけさ」

肩を竦めつつ、正直に伝える。

まあ、この理由は嘘ではない。

ただ『一部情報が抜けている』だけでね。

「なっ！ 殿下がまともなことを言っている!!」

「……チャールズ、本当に君だけは仕事を倍にしてあげようか？」

目を見開いて、再び失礼なことを口走ったチャールズにニッコリと微笑みかけると、彼はビクツと体を震わせ、ブンブンと勢いよく首を横に振った。

「じゃあ、本当に気にせず空いた時間を楽しんでいいんですね？ 毘わなではないんですね!」

「毘わななんて仕掛けていないよ。『私がいる間は』ゆっくりしてほしいと思っただけだよ」

「よっしゃああああ!!」

チャールズが拳を振り上げてガッツポーズをする。

……君、一応公爵令息だよな？ 貴族のふるまい的なものはどこにいったんだい？

「そういうことだったら、さっき言っていた資料をすぐに！ すぐに!! 持ってきて帰らせてもらいます!!」

チャールズが満面の笑みで言う。

「今日はアンネ嬢も城に来てはるはずだし、彼女に時間がありそうならデートにでも誘おうかな?」

もの凄く嬉しそうな顔をしているチャールズを見ると、私の心も和む。

ああ、是非とも『私がいる間は』ゆっくりと恋人との時間を楽しむといいよ。

「……俺もこの研究資料の訂正箇所を直したら、仕事は終わるし……シリーカを誘って本を読みながらお茶でもしようかな」

私とチャールズとのやり取りを見ていたネルトも、いそいそとやりかけの仕事に集中し始める。

「今日はジョアンナ嬢も来ているみたいだから、一緒にお菓子食べよ〜っと。最近のジョアンナ嬢は、仕事とか僕のお嫁さんになる準備とかで忙しそうだし、労わがつてあげないとね!」

シヨーンも、途中でお菓子を食べ始めたせいで止まっていた仕事を再開する。

ちなみに、私の弟である第二王子のシヨーンには、城内に自分用の執務室がある。

だから、私の執務室で仕事をする必要なんてないんだけど……わからないとすぐに私に聞きに来るのだ。そのせいか、最近ではわからないことが多そうな仕事をする時には最初から私の執務室に来てやっている。

シヨーンにだって仕事を手伝ってくれる側近はいるし、仕事を教えてくれる人間だって大勢いるはずんだけどね。

まあ、弟に懐かれて嫌な気はしないから、追い出したりはせず、心が折れない程度に厳しく指導するようにしている。

そんなことを考えていたら、ずっと黙々と仕事をし続けていたクールガンがボソッと「そーいえは、この前ミルマから仕事について教えてほしいと言われていたな」と呟く

のが聞こえた。

……クールガン、それは多分君に会うための口実であって本当に教えてほしいわけではないと思うよ？

ミルマの仕事はパーティー付きの侍女だから、仕事内容はクールガンとはまったく違うし。裏の仕事としてやっている隠密的なことについても、彼女の一家は昔から王家を裏から支えてくれていた一族だから、家族に聞けばいくらでも教えてくれるはずだしね。

——少し前から、徐々に一緒にいることが増えてきたクールガンとミルマ。私も二人の関係を探りを入れるほど野暮ではないから、今、どのような関係になっているか詳しくはわからない。

けれど、ミルマの恋を応援しているパーティーはさり気なく……したつもりの、直球でミルマに恋の話を振っているようで、多少の話は入ってくる。

基本的に控えめなミルマではあるが、どうやら「自分は存在感が薄いから人よりもしっかりとアピールしないとイケない」と思ったらしく、最近では彼女なりに精一杯クールガンに意識してもらおうと頑張っているようだ。

その努力は、クールガンには「仕事を健気に頑張る後輩」という誤った形ではあるものの確かに伝わっているらしく、彼のほうも彼女の頑張りに応える形で相手をしてあげ

ているみたいだ。

先日ミルマのコンプレックスである「存在感の薄さ」に対して、「それは君の武器になる」なんて言葉をプレゼントしたらしく、元々彼に恋しているミルマはさらにその想いを募らせたらしい。

まあ、私としてもミルマの存在感の薄さは、諜報活動をする上で大きな武器になるだろうと思っっているから、是非とも磨いてほしいところだ。

そんな感じで今のところ一方通行な恋という感じの二人ではあるが、最近、クールガンがただの仕事の後輩という以上にミルマを気にかけることが増えてきている。

具体的には、今まで美味しそうなお菓子を見れば、パーティー用に取っておこうかと呟いていた彼が、ミルマの分を確保するようになったり、手が空いている時に自主的に彼女の仕事の様子を見に行ったりする感じだ。

クールガンは元々年下の兄弟が多く、見た目によらず面倒見がいいほうではあったが、数多くいる部下や仕事の後輩に比べても、かなり手厚く相手をしてあげているのは間違いないだろう。

……まあ、当の本人は無自覚っぽいけどね。

「ん？ 今日皆、早く上がれるのか？ 俺も早く上がれるのか？ なら、鍛練ができ

るな!!」

クールガンの眩きに内心苦笑していると、中途半端に話を聞いていたらしいバルドが、嬉しそうにニカッと笑う。

バルドは相変わらずブレないね。

「バルド、残念だけど、君は私の護衛だから私がここで仕事をしている間は仕事が続くよ」

「……そうか」

私の言葉に肩を落とすバルド。

しかし、バルドの仕事はあくまで通常業務であり、私が無茶ぶりをした結果ではないから、これは仕方ない。

大体、今日の彼は昼からの勤務だから、他のメンバーと違い、午前中は自由に過ごしていたはずだ。

「ああ、そうだ。皆、この後、恋人をデートに誘うつもりならば早くここにいたいよ。多分そのうち……」

「……え？」

私が指定した資料を取りに行こうと歩き出していたチャールズが振り返り、キョトン

とした表情を浮かべる。

一瞬遅れて、ネルトとシヨーンが私のほうを向き、クールガンが何かを予感したように溜息を吐いた。

ちなみに、バルドは自分だけ早く上がれないとわかった時点で、こちらすることに興味を失ったようだ。

ただ、護衛らしく何かの気配に気付いたのか、意識を扉に向けて少し警戒するような素振りを見せた。

——コッコッココンッ!!

バルド以外の視線を受けて、私がニッコリと笑みを返すのと、高速のノックが部屋に響くのは同時だった。

バルドが少し警戒しながらわずかに扉を開け、その先にいる人たちを確認する。

「殿下、女性陣が来たぞ」

が、扉の向こうの人物が見知った相手だったことで、一気に警戒を解いて扉を開いた。……おかしいな。普通、こういう時には、来訪者が誰かを私に伝えて、入室の可否を確認するものなんだけだな。

まあ、バルドだし仕方ないか。

それに、さすがのバルドも誰に対してもこういう対応をしているわけではないね。「殿下、失礼致しますわ!!」

「セ、セシル様あああ」

最初に執務室に入ってきたのは、ジョアンナ嬢だった。

その腕には、私の愛しい妻……バーティアの腕がしつかりと確保されており、半ば引つ張られるような形で連れてこられたことが容易に想像できる。

ちなみに、ジョアンナ嬢に抱え込まれていないほうの腕には、クロがキョトンとした表情で抱きついていた。……あれは、ただバーティアにくっつきたくてくっついていただけで、特に意味はないだろう。

いつものことだ。

「失礼致しますわ」

続いて入ってきたのは、アンネ嬢、シーリカ嬢、シンシア嬢だ。

バーティアは一人オロオロとしているけれど、他のメンバーは笑顔なのに妙な迫力がある。

「殿下、人払い……は必要なさそうですわね。扉だけ閉めさせていただきますわ」

入室してすぐに部屋の中を見回し、私と側近たちしかいないことを確認したジョアン

ナ嬢は、ニッコリと笑みを浮かべたまま、スツと片手を上げた。

すると、後ろからついてきていた他の令嬢たちが心得たとばかりに扉を閉め、鍵をかける。

扉の外には、この部屋を守る護衛が、状況が理解できず困惑した表情のまま立っていた。それ以外にバーティア付きの侍女たちもいたけれど、令嬢たちの行為を咎める者は誰もいなかった。

むしろ、侍女たちに至っては「よくわからないけれど、これで全部お任せできる」とも言うようなホツとした表情で、閉まる直前に綺麗なお辞儀をしていた。

「ジョアンナ嬢？ それにバーティア様にアンネ嬢たちまで……。え？ 何これ？ 怖いんだけど」

自分が向かおうとしていた扉から勢いよく入室してきた女性陣に、状況がわからずポカンッとしていたチャールズが、我に返ってボソッと呟く。

若干頬が引き攣っているように見えるのは、きつと見間違いではないだろう。

「ジョアンナ嬢たちにティアまで。一体どうしたいんだい？ ……ああ、チャールズ。心配はいらないよ。仕事に『直接は』関わらない話だから」

頬をピクピクと引き攣らせながらも笑みを浮かべているジョアンナ嬢を迎え入れつつ、